

自分より大きいものを食べなければと上役は鯨の刺身を頼む

久松洋一『ビジネス・ダイアリー』 1994年

ひたすらに寿司を食いたき今宵なり貝、雲丹、いくら食べぬ我なれど

黒岩剛仁『トリアージ』 2006年

もぐもぐと烏賊の刺身を噛んで居る緩慢ぶりを咎めたまふな

白石研蔵『玄冬の月』 2013年

カニグラタン食いたがる子と食わせやるわれと夢にてあわく会いたり

奥田亡羊『花』 2021年

【甘味】

母を看る話やうやく纏りて皿の外郎四つが減りぬ

又野萋『草衣』 2002年

東京生れには望郷の味がする桜餅かなみどり葉も粹

築地正子『自分さがし』 2004年

ガーナ人の先生がくれしガーナチョコ味はひ深きを言ふ日本語で

大口玲子『自由』 2020年

【水】

冬やまの林を行きて渴きては鹿のごとくに水飲まむとす

川田順『寒林集』 1947年

一杯の水をしんじつ冷たしと飲みぬるときにこの救あり

遠山光栄『褐色の実』 1956年

死の前の水わが手より飲みしこと飲ましめしことひとつかがやく

竹山広『とこしへの川』 1981年

ひと粒の幸ひを得し日の果てに寝つかれずつめたき水を飲み干す

横山未来子『水をひらく手』 2003年

【ソフトドリンク】

さめざめと泣きてありにし部屋を出で事なきさまに紅茶をすする

柳原白蓮『踏絵』 1936年

饒舌になりゆく人が卓にゐて色濃きジュースわれは飲み終ふ

真鍋美恵子『玻璃』 1958年

毒入りのコーラを都市の夜に置きしそのしなやかな指を思えり

谷岡亜紀『臨界』 1993年